

染香 ぜんこう

福泉寺寺報
令和5年8月
第118号
毎月1日発行

前々坊守が教えてくれたこと

去る八月二日、前々坊守が往生いたしました。皆様に支えられて、ありがたい通夜葬儀を営むことができました。改めて御礼申し上げます。

やさしい「直子おばあちゃん」でした。子どものいなかったおばあちゃんでしたが、東京の甥御さん姪御さんをはじめ、この期間、一緒に過ごした親族の皆さんも、本当にやさしい人たちばかりでした。特に甥御さん姪御さんは「あっぱれ大往生」のおばあちゃんを涙いっぱいに見送り、そのお姿を見て「おばあちゃんのやさしさを受け取った人たちだ」と感動したことは、これからも忘れないでいたいことです。

他の親族の皆さんとも色々話すうちに、解散が名残惜しいような雰囲気にもまれて、これはおばあちゃんが最後にくれた「贈り物」として、大事に温めたいと思います。



ホームページ



お寺 LINE



子ども行事



さて、おばあちゃんが教えてくれたことですが、皆様もご存じと思いますが、境内の草とりやお花の世話をする姿が思い起こされまです。そのことを本人は、しんどいとか、自分がやっているんだとか、決して言わない人でした。何年前かに、手首をけがして入院した時に、境内のあちこちから草が生え、「これだけのことをしてくれていたんだ」と驚いたのを覚えていています。

黙って周りを支える、これを「陰徳」といいます。たいていは、自分のしてきた仕事について、人に自慢したいものですが、どんな仕事か回ってきてても、おばあちゃんのようにできたらカッコいいと思います。

昭和四十六年から四十八年までの二年間、当時のご門徒の皆様と共に福泉寺を支えてくれた実績を後世に伝えたいの思いで、この猛暑の中、皆様に無理を申しました。住職のわがままをどうかお許しください。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。
(住職)

真宗の法事 あれこれ

【満中陰で納骨】

以前は慣例だった満中陰法要(三十五日・四十九日)での納骨を見送る家が増えました。おそらく「ずっと施設にいたから、少しでも我が家でのんびりしてほしい」「親と別々に暮らしてきたから、ひと月やそこらで納骨は寂しい」といった思いがあるかもしれない、と想像します。あまり先送りしすぎると、タイミングを逃すこともあるでしょうが、やはり御当家の思いに沿いたいと考えています。

ちなみに親鸞聖人は「私が死んだら鴨川の魚たちに与えてやってくれ」と遺言を残しておられます。「骨に手を合わせるな、方向が違う」と家族や門弟に伝えなかったのだろうと思います。



ちょっと あたまの こりほぐし

月に帰ったかぐや姫から、おじいさんおばあさんに手紙が届きました。「つけたきもけいたいわけよ」

さて、何と書いてあるでしょう？

※ヒントは『竹取物語』。答えは裏面です



おてらより

無縁改葬のご案内

お寺の境内地にあるお墓について、使用者が不明のお墓を撤去する手続きを開始いたしました。当該墓に「プレート」を付いたします。情報のご提供を宜しくおねがいいたします。



お盆参り、続けております

諸事情により遅れておりますが、ご都合を伺いながらお参りをさせていただいております。ご心配ごと迷惑をおかけしてすみません。どうぞよろしくお願いいたします。

秋のお彼岸・永代経のご案内

日時：九月二十三日(土) 十四時

講師：歓喜庵様、当山住職(予定)

ご参拝を心よりお待ちしております。

あふれでたのはやさしさだった

次の詩はいつもニコニコ笑っている
Tくんが書いてくれたもの。こんな思いを
してきたということは、この詩を読むまで、
わからなかった。

父と母から教わったこと

「あんななんか産むんじゃないよ」
という 母の言葉

ぼくを湖に突き落としとして殺そうとした
父の行動

小さい頃からぼくは生きてはいけない
人間だと 教えられました
入水 首つり 薬の大量服薬……

病院のベッドで 母からかけられる言葉は
「まだ生きてたん？ 死ねばよかったのに」
でした

大人は 誰も助けてくれなかった
僕には 生きる意味も価値もありません
いまでも 考えは変わっていません
ぼくは 必要のない人間です
ただ 生きていくだけです
これからも ずっと

乾井教官は開口一番、「書いてくれて、あ
りがとう」といい、あとは言葉にならない。
「ぼくも、親から同じことを言われまし
た。『あんたら兄弟なんか、産むんじゃない
よ』って。でも、民生委員のおばさんが

来て、『あんなのことを必要とする人も
きつといるから、そう思って生きていきな
さいね』って、言ってくれました」
仲間から、そんな感想を聞いたTくんは、
次の授業でこんな詩を書いてきた。

最近思うこと

僕は

誰からも必要とされていない人間だから
自分から死のうとしたり

家族や彼女に殺されそうになっても
何も言ったりせずに

受け容れていることが多かった
でも 最近も

こんな僕でも 必要としてくれている人が
いるってことがわかり

僕も 生きていてよいのだと思えるように
なりました

「ぼくは必要のない人間です」が、「こん
な僕でも必要としてくれている人がいる」
に変化し、「生きていてもよいのだ」と思っ
てくれた。この教室が、確実にTくんの心
を癒やしているのが見てとれて、うれしか
った。

Tくんのニコニコ顔は、彼が自分の身を
守るために発明した「鎧」だった。人から
嫌われたくなくて、いつも意味のない笑顔
を浮かべている。それが、かえって人を
いらだたせることもあった。

ところが、この授業に参加するようにな
ってから、Tくんの顔からだんだん作り笑
いが消えていった。ときに、愛想のない
ブスツとした表情もできるようになって
きた。やがて心から笑えるようになってい
った。そんなTくんが、最後の授業に書い
てきてくれた詩。

気持ち

これから先

どんなことがあるかわからないけど
少しでも 僕のことを必要と思ひ

気に掛けてくれている人がいることを
忘れずに

前向きに生きていきたいと
思えるようになりました

ああ、やっと生きる気力を持ってくれた、
とほっとしていると、Tくんの向かいの席
の人が、いきなり机から身を乗りだして、
「おい。おれ、おまえのこと好きだからな。
死ぬんじゃないぞ！」と叫んだ。それは、
いつもドラ猫のように肩をいからせて
いる強面の子だった。この教室には珍しい
タイプだ。実はTくんは、この強面くんの
ことが大の苦手だった。恐くてならなかつ
たのだ。

その強面くんから、突然「好きだからな。
死ぬんじゃないぞ！」と言われ、Tくんは
びっくりして強面くんを見ていた。それか

ら、ゆっくりと笑顔を浮かべ、うん、と
うなずいた。
ほんものの笑顔だった。強面くんも、
照れくさそうな笑顔を見せた。ドラ猫の
ような強面くんが、急にかわいらしく見え
てきた。
(終)

(奈良少年刑務所『絵本と詩の教室』(2018・寮美千子著)

編集後記

夏休みの間、土日以外はラジオ体操をし
ています。初の試みです。

育成会の子どもは三十人余りいますが、
そのうちの五、六人が集まってきました。眠
い目をこすりながら、特に何かを楽しみに
している様子もなく、毎日来ます。

最近のお子さんは、ラジオ体操をする機
会がとても少ないので、最初は十分にでき
ませんでした。しかし、日を重ねるうちに、
上手になり、かなり正確にできるようにな
りました。もし県大会があれば、出場を
目指してみたくなるほどです。

この何気ない思い出が、生涯の財産にな
るのだと信じて、朝からフル稼働です。

